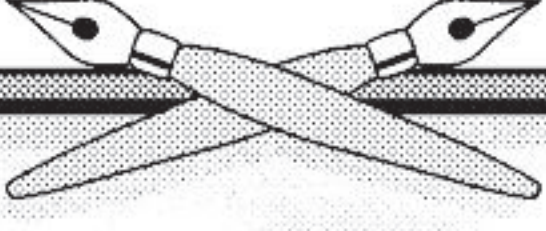


だい しょう か し ゅ ぎ ょう じ だい
【第2章 マンガ家修行時代】



昭和7年
 おおきな希望を胸に
 良輔は念願の
 太平洋美術学校
 予科に入学



※予科：旧制の大学で本科に進む前の教育課程のこと。

昭和7年(1932年)



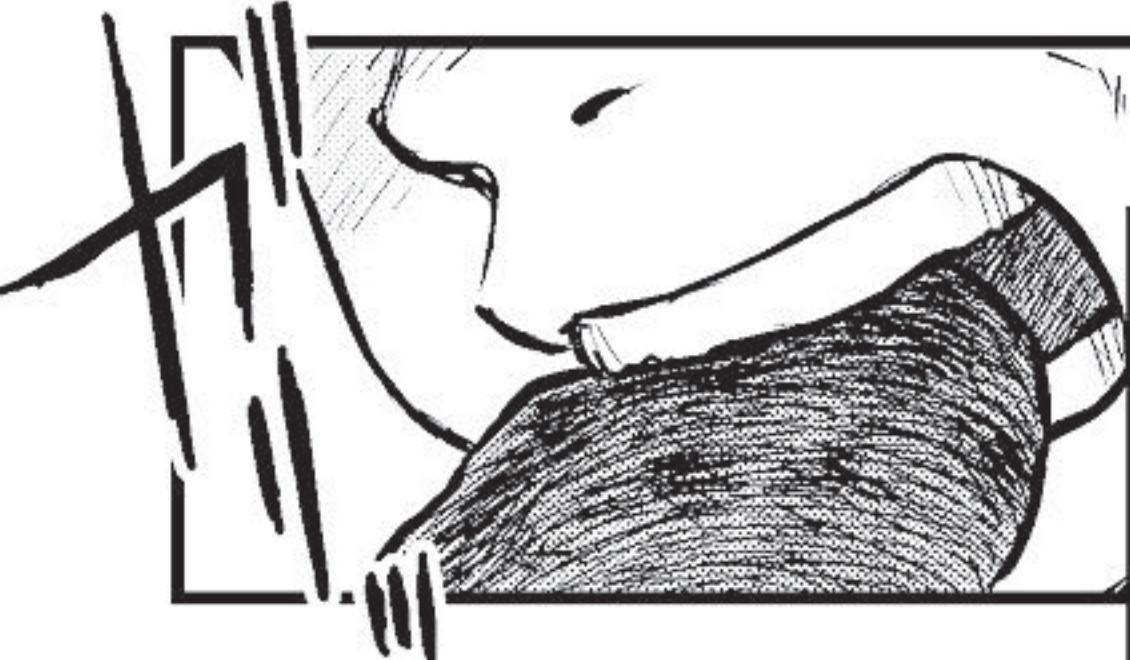
腹へったあ…
 ぐう…



染物屋で
 下絵を描いて得た
 わずかな賃金で
 食べていくのも
 やつとの貧しい
 生活を送っていた

しかし家出同然で
 仕送りがほとんど
 なかったため

那須良輔(19才)



あまりの空腹に
 木炭デッサンで
 消しゴム代わりに
 使うパンを盗んで
 食べた…



炭の味しか
 せん…

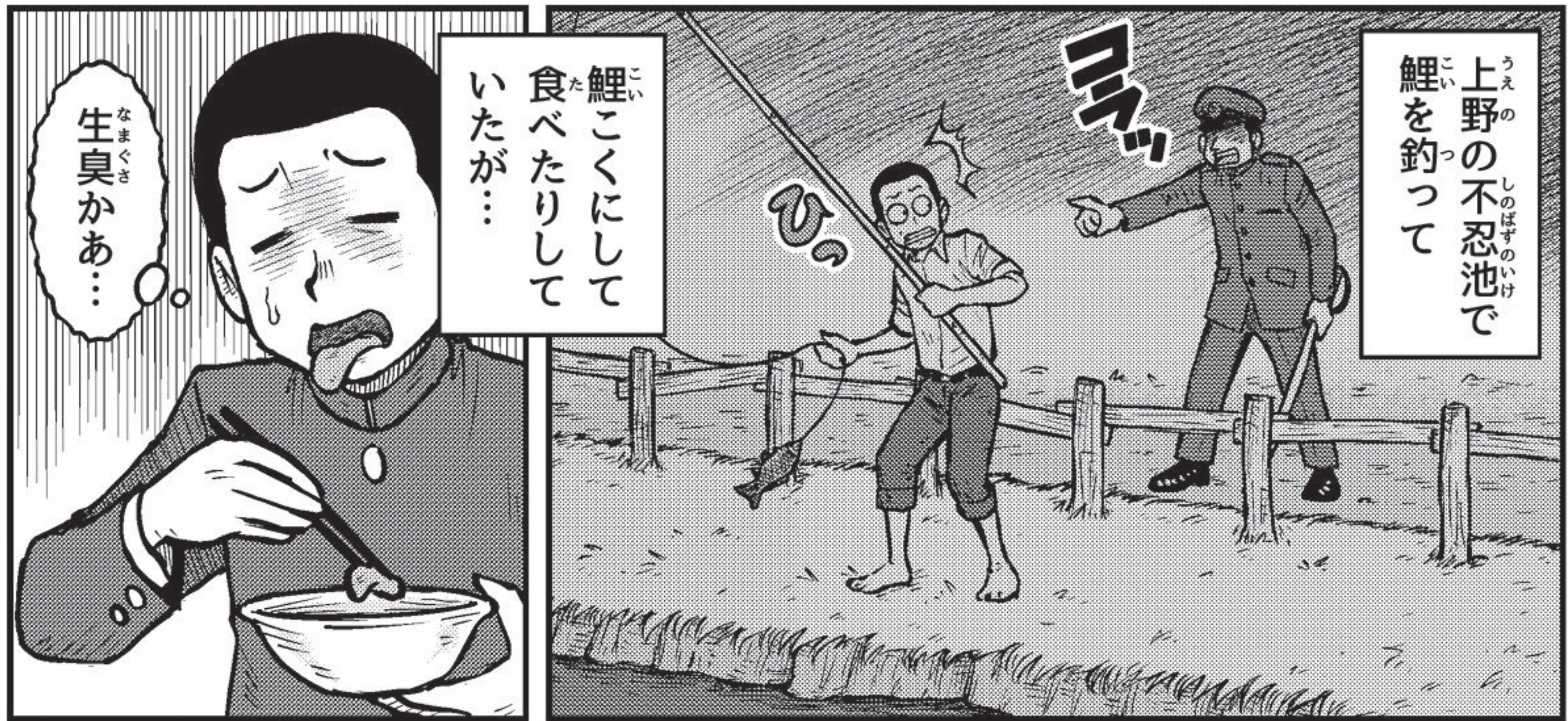


キョ

キョ

ズ

ズ



生臭かあ…
なまぐさ

鯉こくに
食べたりして
いたが…

上野の不忍池で
鯉を釣って

コッ

ひ

※鯉こく…鯉の味噌煮。



タベモノナシ
ガシスル

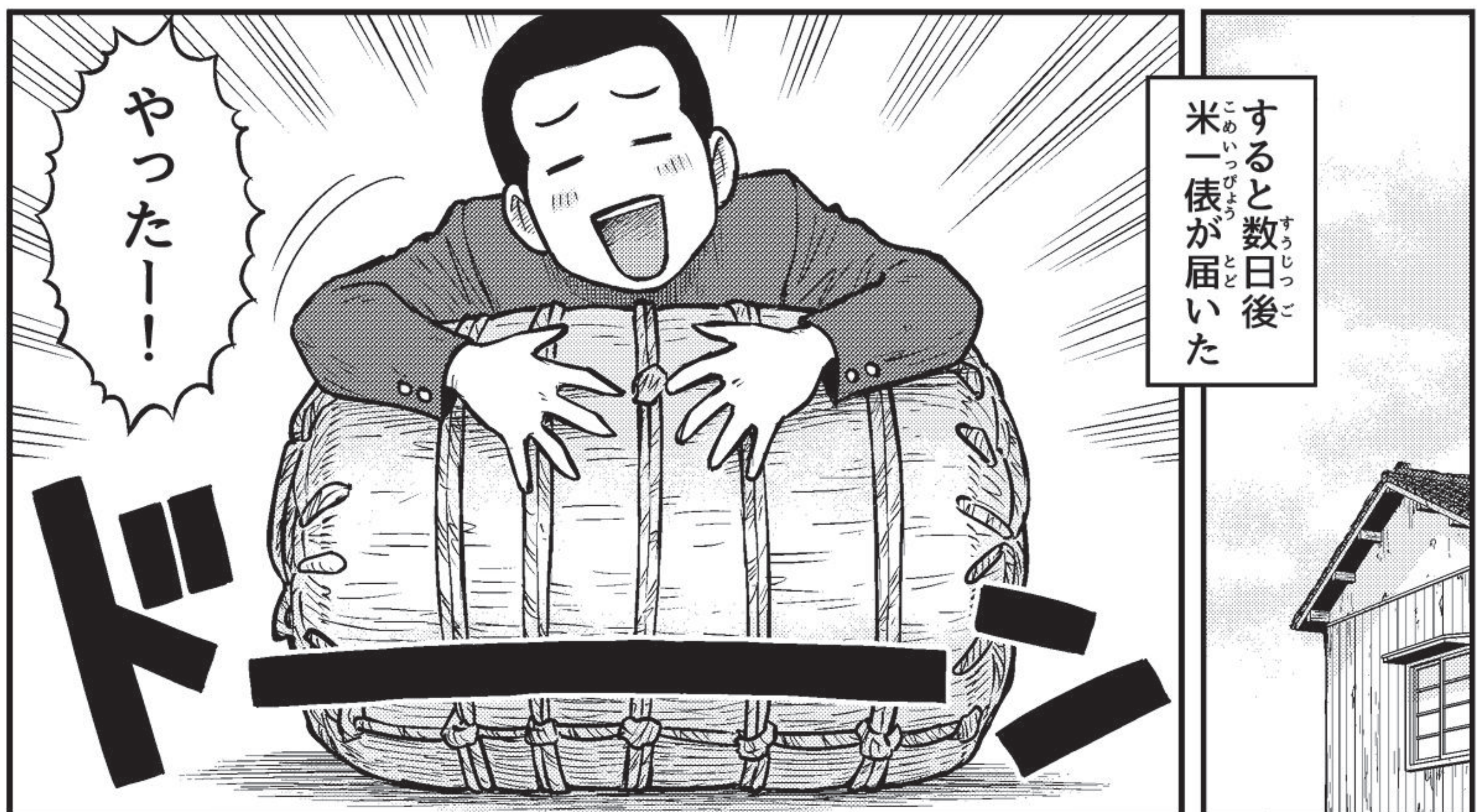
湯前の父親に
泣きの電報を
入れた…

ついには飢えて
まともに
動けなくなり

ご

た

っ



やったー!

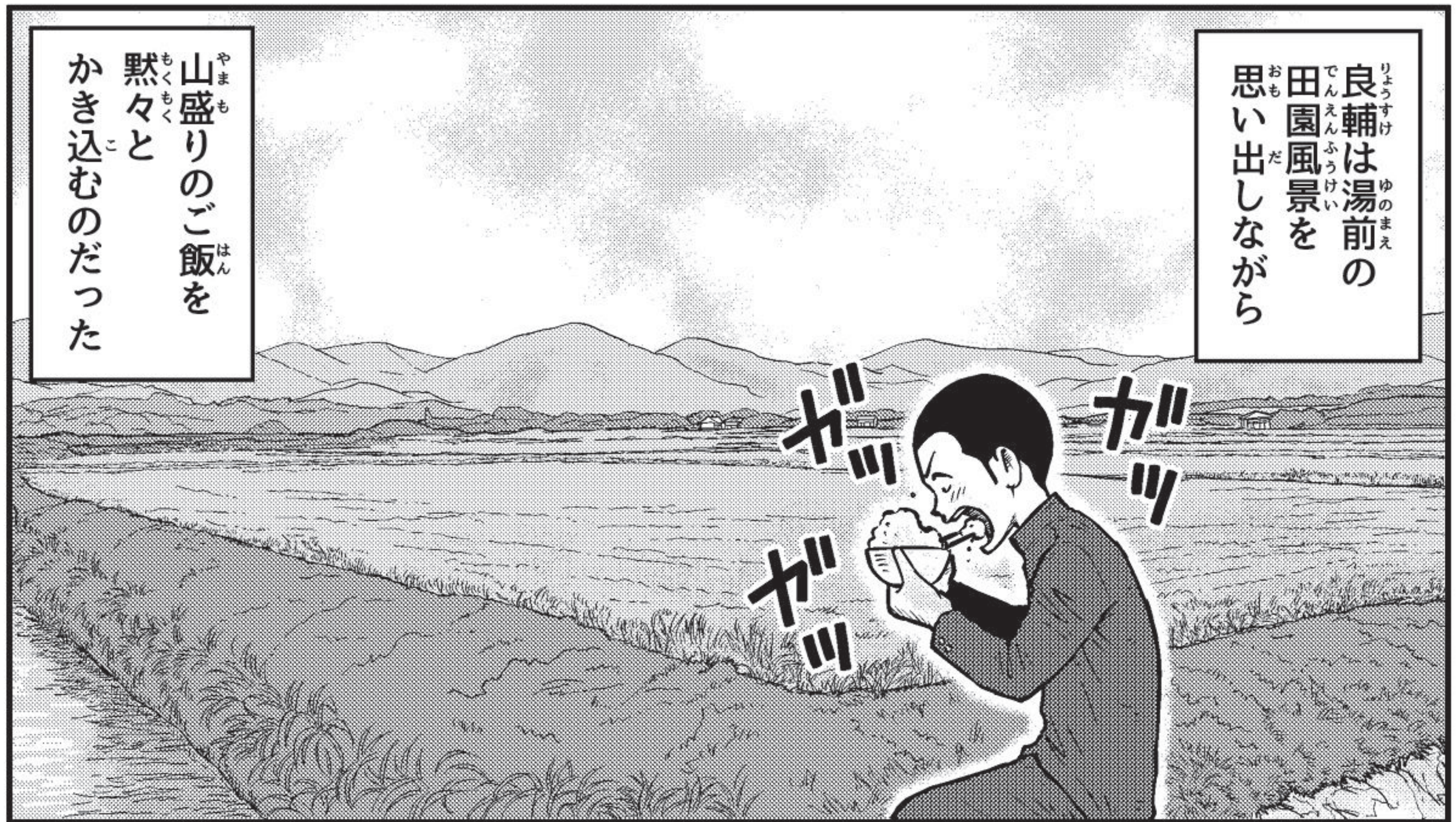
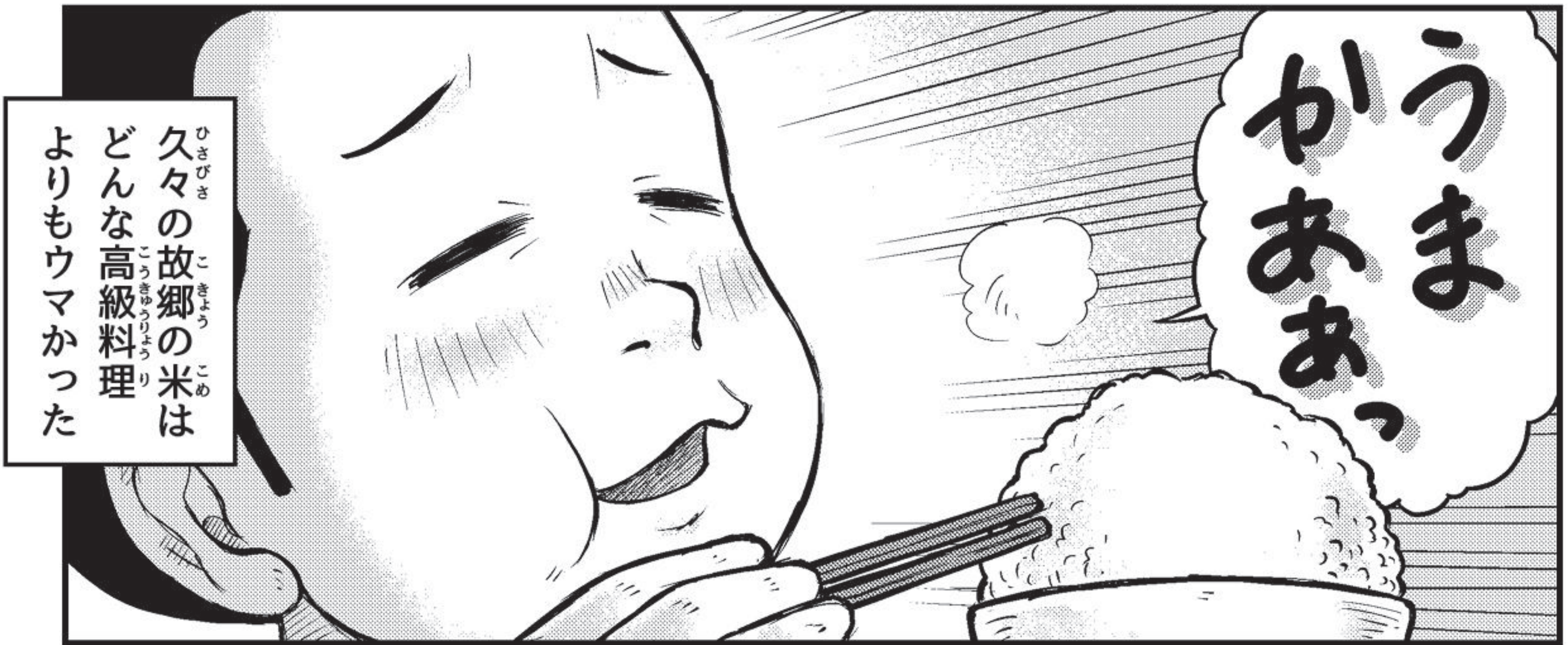
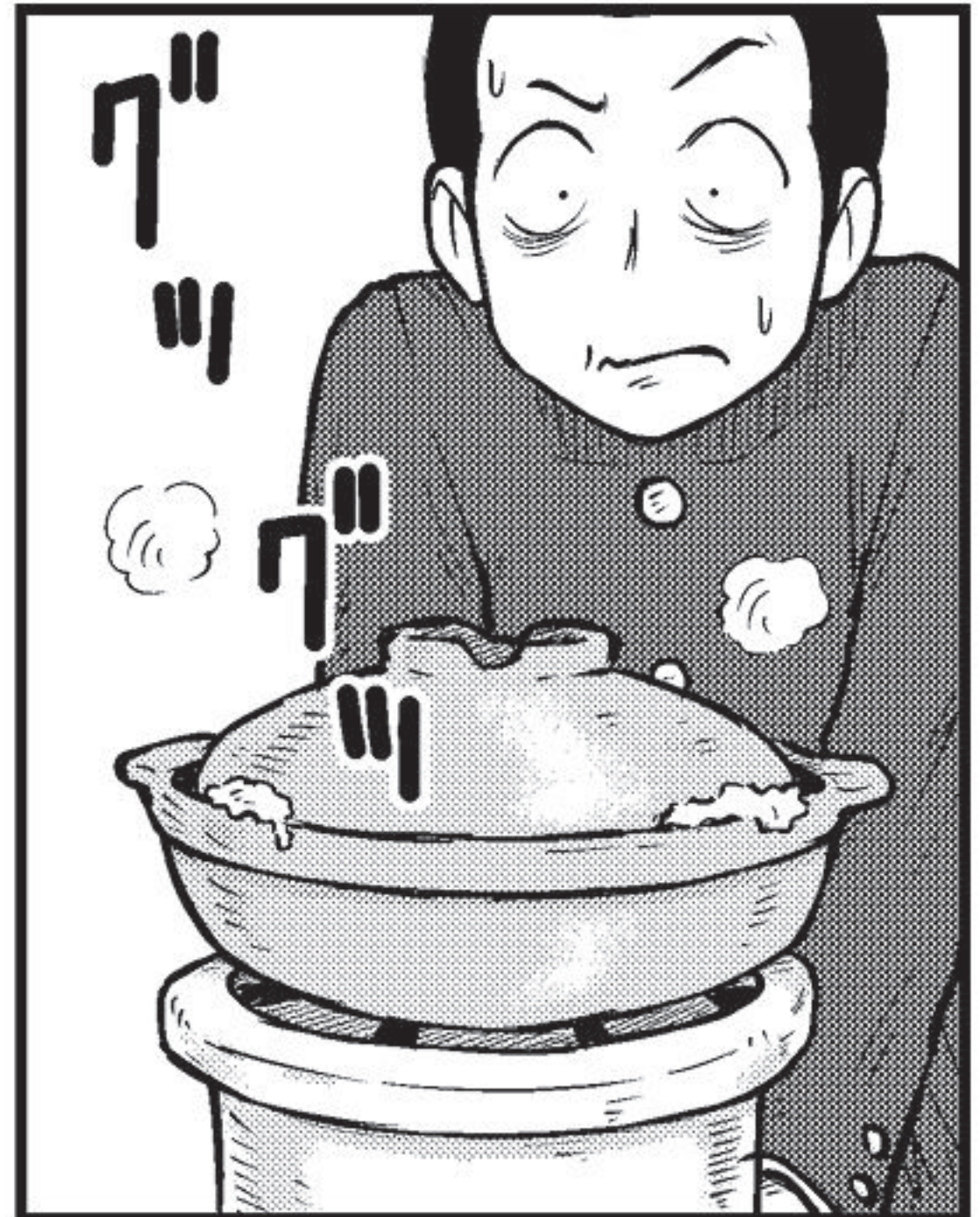
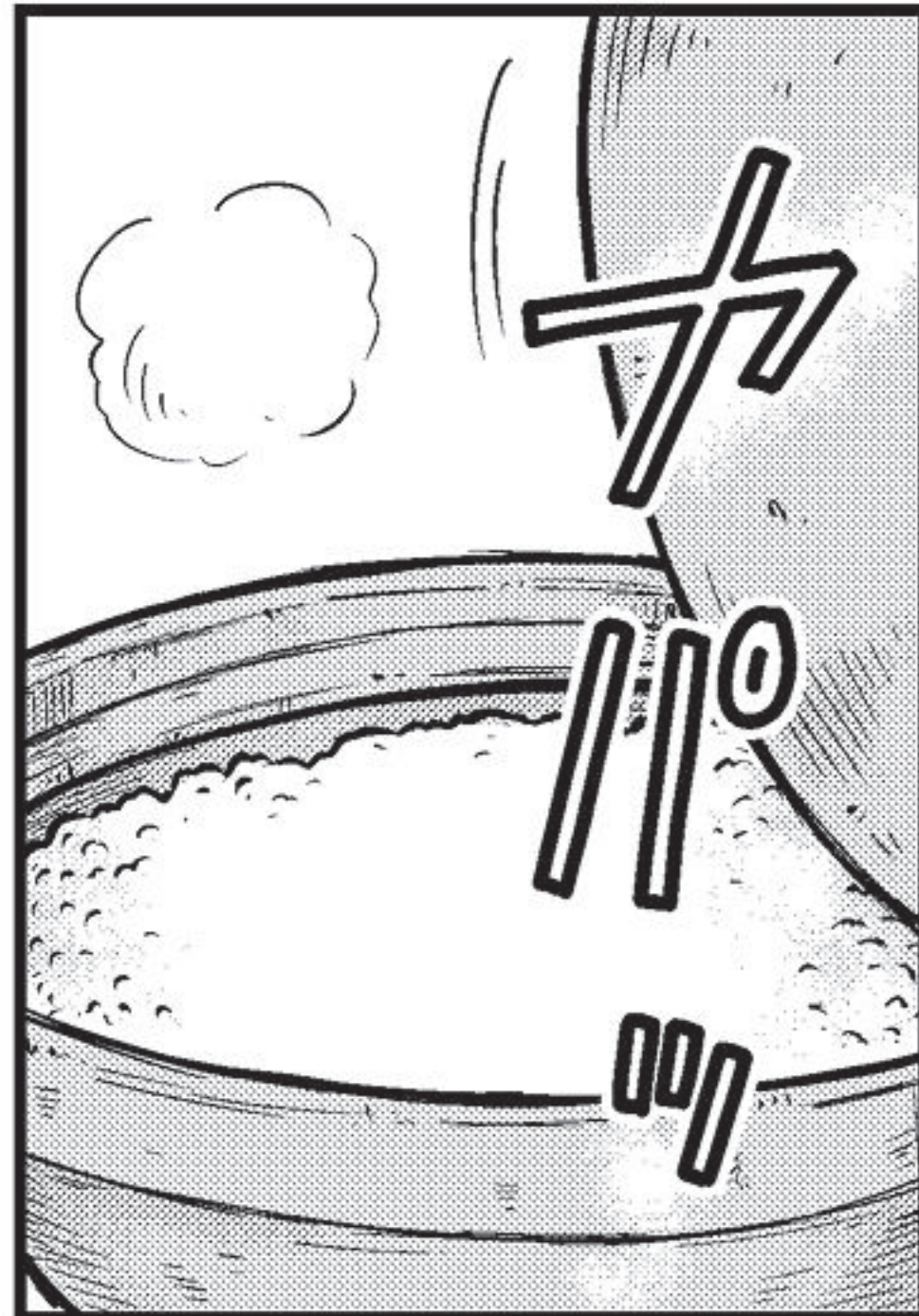
すると数日後
米一俵が届いた

ド

ド

※米一俵…60kg(4斗)。

はふっ



④湯前町はじめ人吉球磨は全国でも有数の米どころ。
お米から造られる焼酎も有名。湯前町には「豊永酒造」「林酒造場」の二つの蔵元がある。





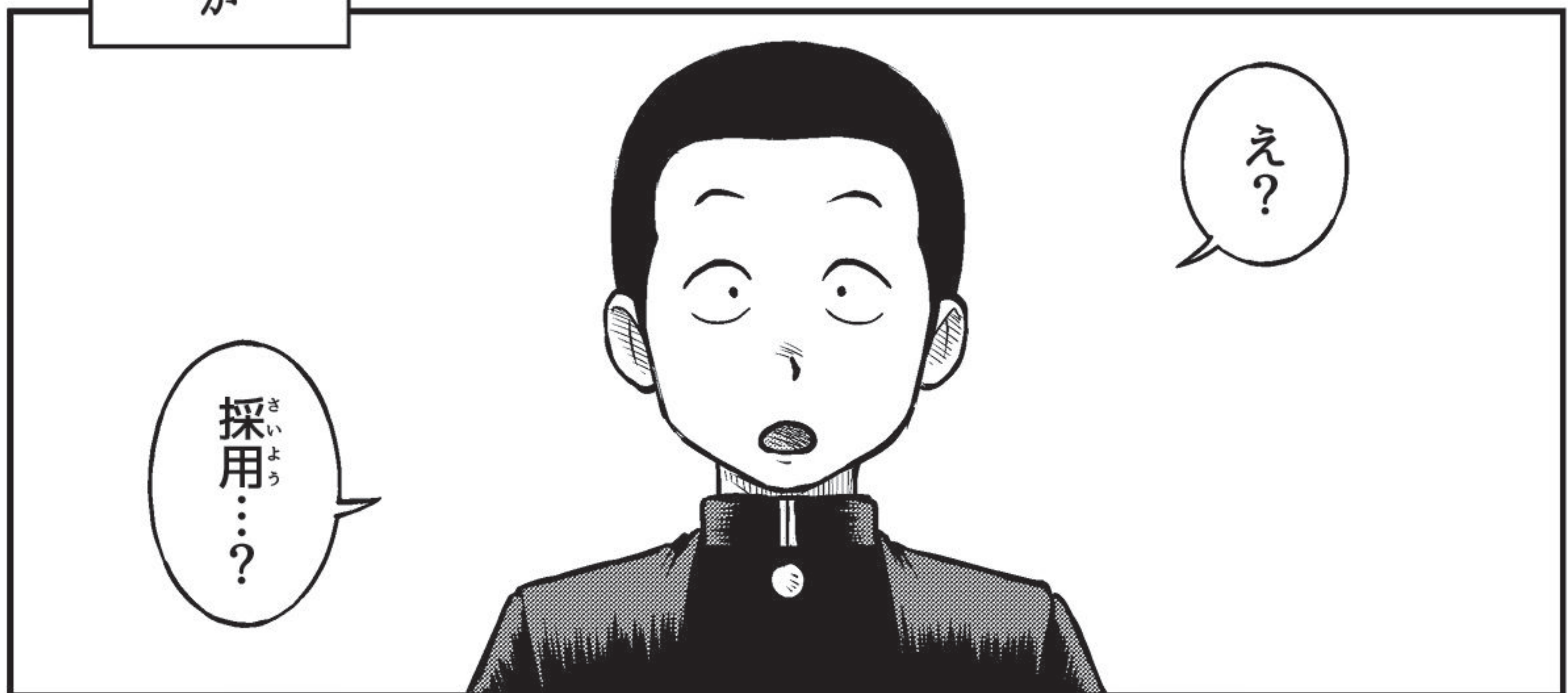
それでもめげずに
良輔はマンガを
描き続けた

西洋画だろうと
マンガだろうと
とにかく良輔は
絵を描いて
いたかったのだ



じつぎょうの にほんしゃ
実業之日本社

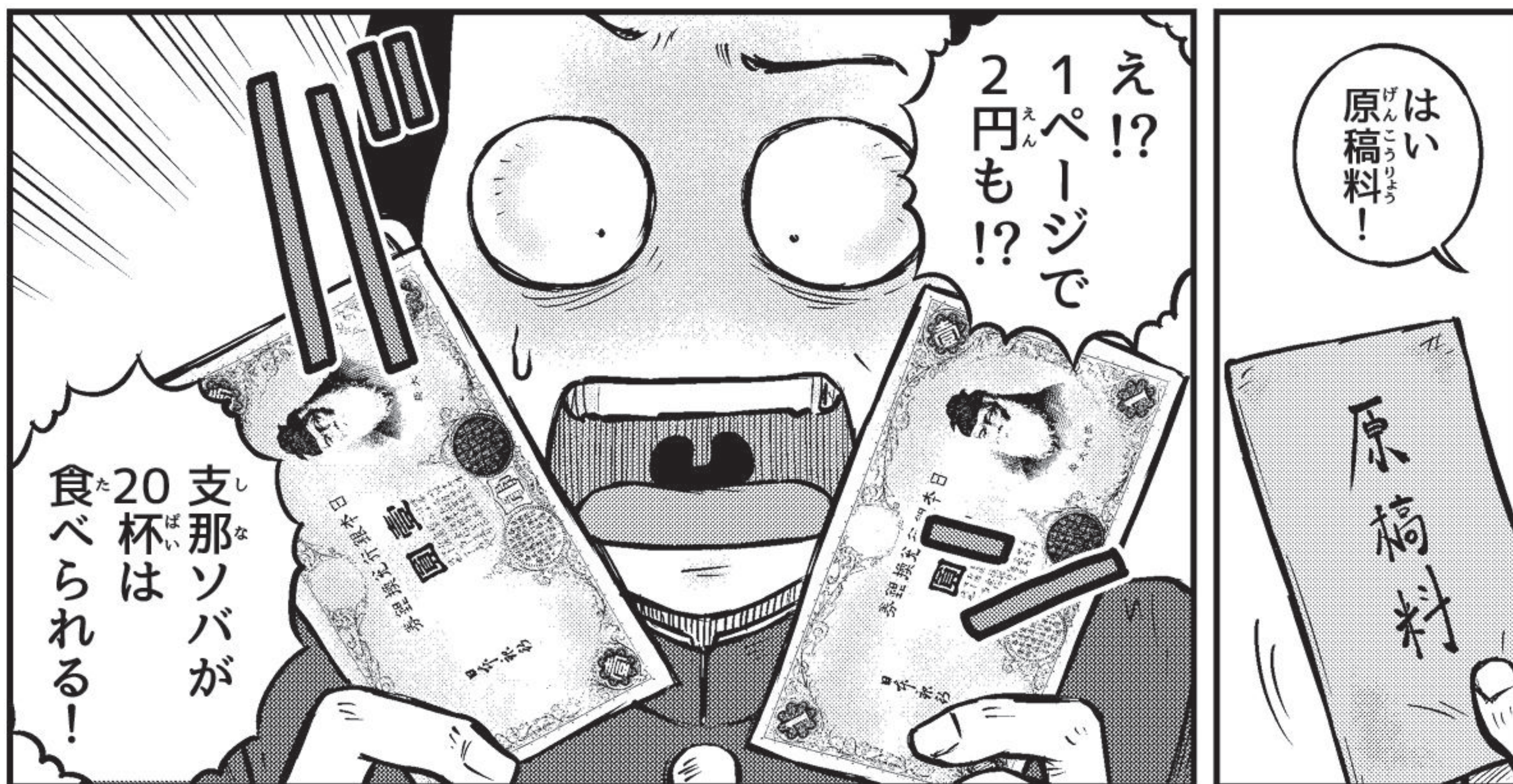
そして一年後
ついにその日が
やって来た…



採用…?

え?

※日本少年…当時の小・中学生を対象としていた月刊雑誌。



※支那ソバ…ラーメンのこと。

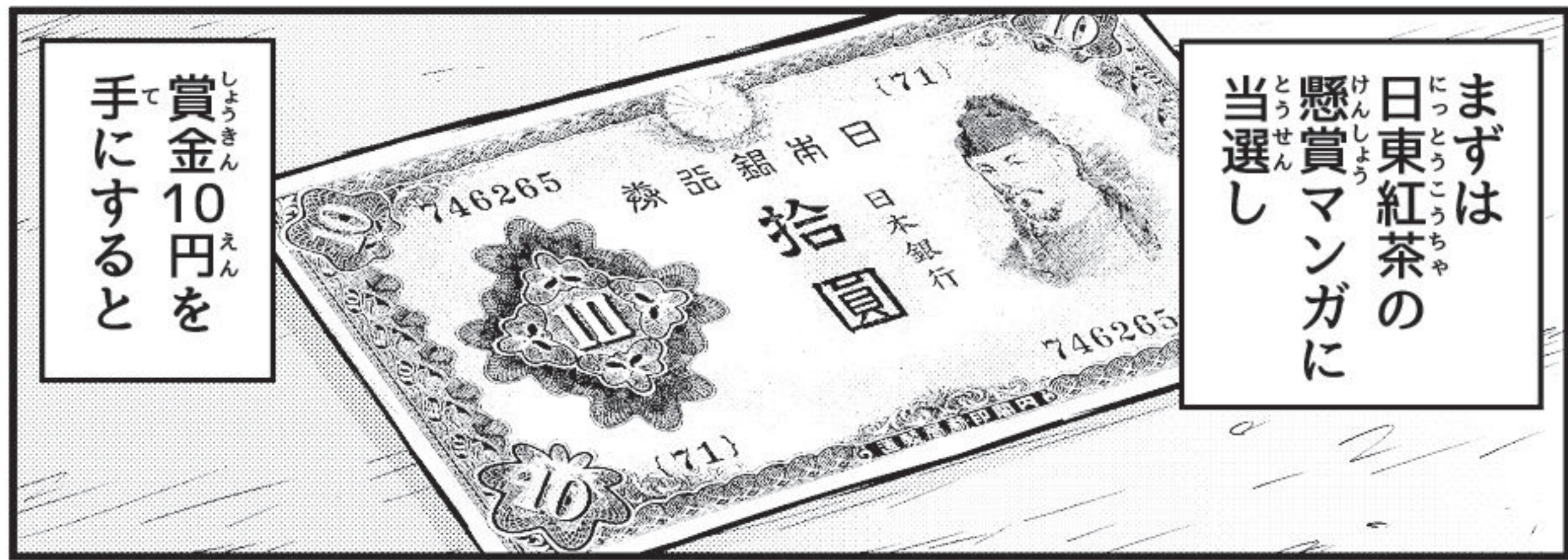






自分の実力が認められたことと大金を得たことで良輔は天にもものぼる気持ちになった

描いて描いて描きまくつばああーい!!



賞金10円を手にする

まずは日東紅茶の懸賞マンガに当選し

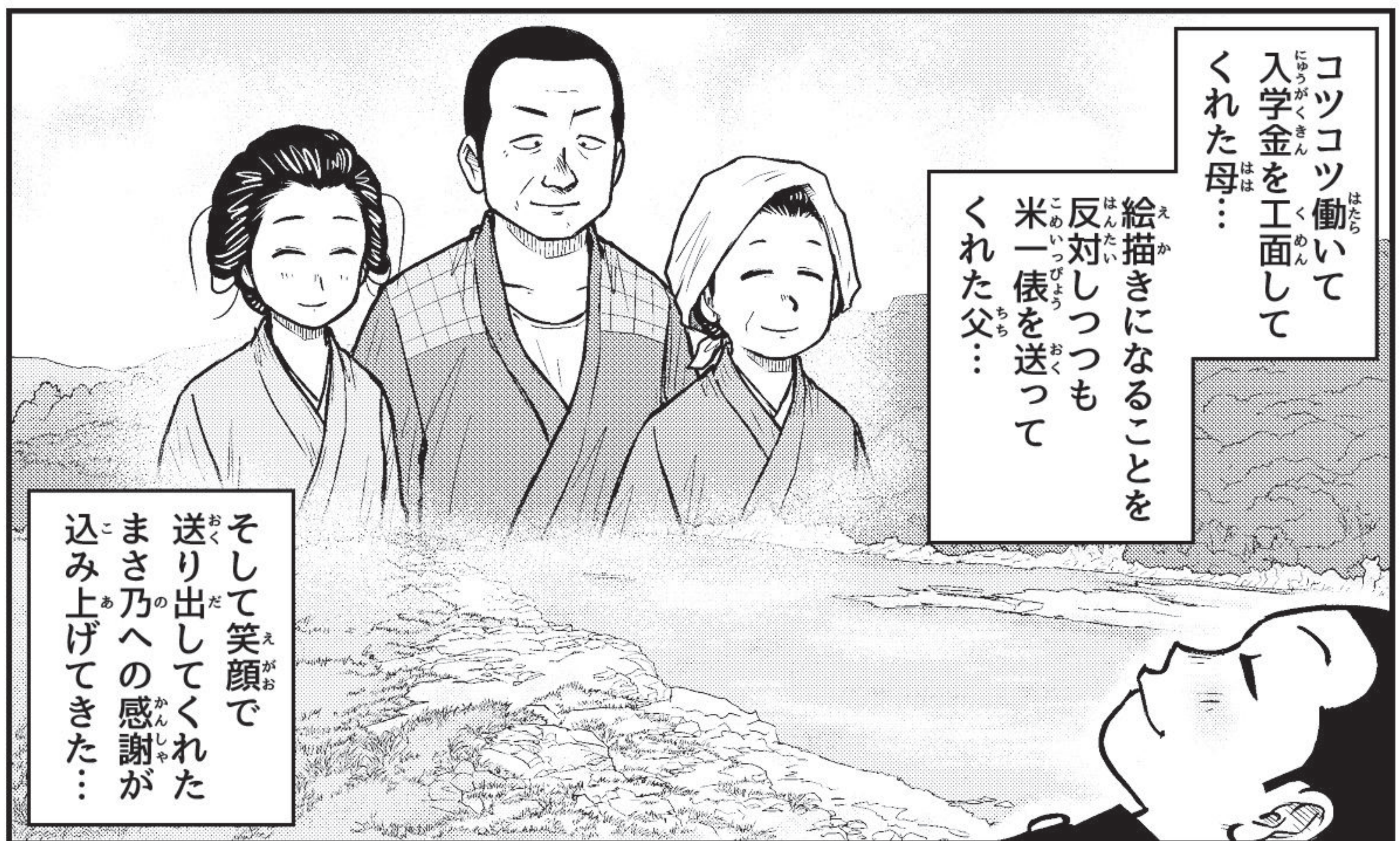
そしてこれを機に門前払い生活が一転する



今度は『少年倶楽部』の付録2ページの仕事が舞い込む

その使い道を決める間もなく

※少年倶楽部…大日本雄弁会講談社が創刊した小・中学生を対象とした雑誌。





その後も次々と
各出版社から
仕事がい込み

内職のつもりで
始めたマンガ家
だったが

いつの間にか
本職のように
なっていた

カリ

カリ

カリ



その電報は
実業之日本社の
編集長からの
呼び出しだった

……？

ぴらっ

ホリ
ホリ



那須さん
電報です

はい

コンコン



……という
良輔の期待は
大きくハズれる

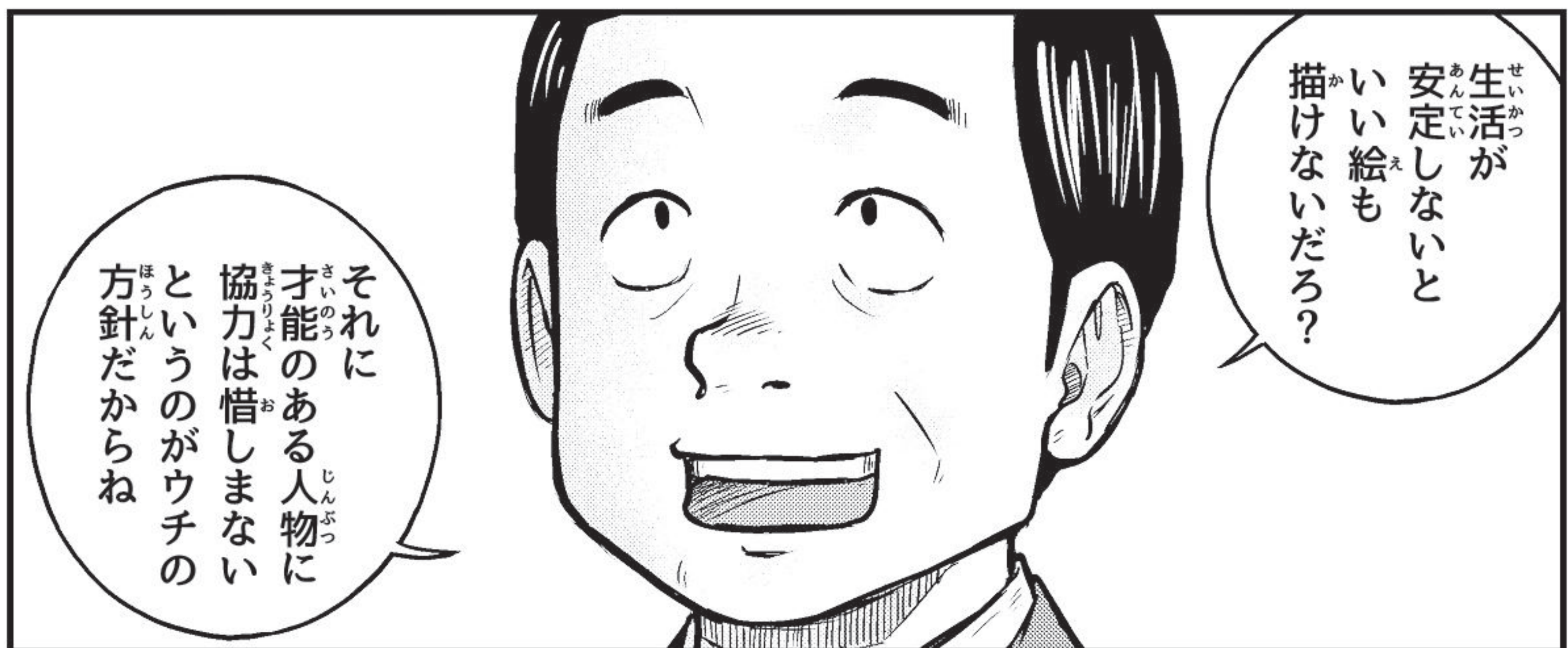


新しい仕事の
依頼かな？

カッ

カッ







こうして良輔は
 実業之日本社との
 専属契約を結び

洋画家の道から
 マンガ家の道を
 歩き始める

洋画家もマンガ家も
 同じ『画家』ばい！



専属期間中に
 「のんきな殿様」と
 「わが輩は『のみ』である」
 を連載

君な殿様
 那須良輔

阿鞠人吉
 わが輩は『のみ』

大地震だ
 たすけてくれ！

カー
 カー
 カー

釣り
 カリ
 カリ

※大人マンガ：アメリカのナンセンスマンガ（意外な展開やギャグが主なマンガ）の影響を受けた大人向けのマンガのこと。





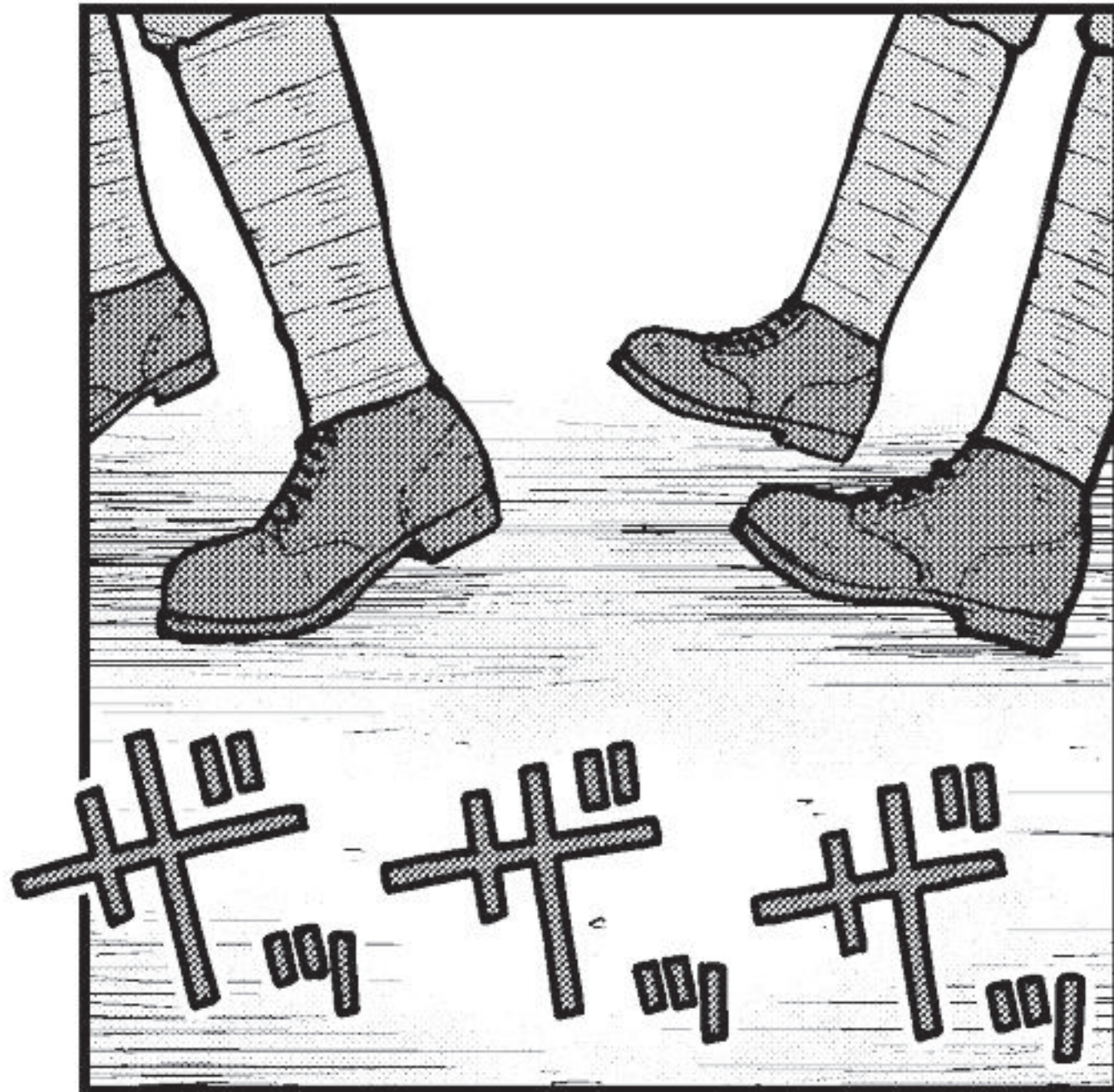
カバンいっぱいのお土産を持って湯前に帰省したり



両親を東京見物へ呼んだり



友人と遊覧飛行機に乗ったり



風刺から風景へ

鳥羽絵とポンチ絵 風刺から風景へ

このマンガのタイトルは「風を描く人」。

そこには主人公那須良輔が人生の前半に風刺画、後半に風景画を描いてきたので「風刺・風景画を描く人」という意味が込められている。そこで那須が若い頃に描いてきた「風刺画」について少し掘り下げてみよう。

日本には絵とセリフの組み合わせによる絵巻物文化や「戯画」（または鳥羽絵）という表現形式が発達してきた。

幕末の頃にはイギリスの風刺漫画雑誌「パンチジャーナル」の日本版「ジャパン・パンチ」が発行された頃から「風刺画」（またはポンチ絵）という呼称が一般に使われるようになった。

明治になると伝統的な戯画と外来の風刺画が融合して、コマ割りした絵にセリフをつける現在のマンガの原型が出来上がる。この二つの源流が那須作品でも融合していることがわかる。



「ジャパン・パンチ」創刊号

風刺画と政治マンガ

明治になって創刊された新聞は読者を獲得するため風刺画を積極的に掲載するようになり、その中でも代表的なマンガ家である北澤楽天や岡本一平らは、政治ネタを中心に描いていたので政治マンガ家とも呼ばれるようになった。ここでいう政治マンガというのは時の政治に対する風刺を利かせた内容の1コマ〜4コママンガのことで、対象は大人、ジャンルとしてはエンターテイメントというよりジャーナリズムとしての要素が強い。那須らもその流れの中にある。

現在ではマンガと言えばストーリーマンガが主流で、那須らが描いてきた政治マンガが主流だったのは昭和40年代（1965〜1974年）までだった。主に新聞や雑誌でコママンガとして発表され、単行本としてまとめられることはほとんどないので一般の人たちの目に触れる機会は少ない。

一方ストーリーマンガは雑誌に10ページ以上連載され、対象は子供、エンターテインメント的要素が強く、多くが単行本としてまとめられているので風刺画に比べて読者の目に触れる機会は極



出典：毎日新聞社＝昭和57年（1982年）3月

端に違ってくる。このことが昭和40年代以降、風刺マンガがストーリーリーマンガに取って代わられる原因となる。

那須良輔本人は自分のことを風刺画家というよりも政治マンガ家として認識していたようだ。彼が考える本来の風刺画家とは、本編に登場するイギリスのデビッド・ローの作品のように、言いたいことを自由なスタンスで表現し、それが政治に対するメッセージとなるような作品を描いている人のことをイメージしていた。



デビッド・ローの作品

政治マンガ家揃い踏みⅡ右から那須良輔、横山隆一、小川哲男、那須後方、杉浦幸雄



那須は政治マンガとは政治に対する批判的メッセージを含めた作品のことだと考えていた。彼は政治マンガ家として有名な近藤日出造、横山隆一、横山泰三、清水崑らと共に漫画集団を結成、複雑な社会情勢を絵でわかりやすく伝えるのが政治マンガの役割だと考えてい

たようだ。

この頃の政治マンガは優れた感性で時代を切り取って小さいコマのなかに写し込むという作業を日常的に行っていた。那須はその感性が特に優れており、存命であれば著名な動画投稿者（ユーチューバーなど）になっていたに違いない。



おろかなる獣たちⅡ昭和31年（1956年）2月『漫画家生活50年』より

那須は戦争中に自分が受けたさまざまな不条理をマンガを使って世に問いかけるために政治マンガを描き続けてきた。しかし自分が描き続けてきたのが政治への風刺ではなく、単なる絵に過ぎず、また個別の政治家への批判に過ぎないことに気が付かされる。政治マンガというより政治家マンガになってしまったこと、マンガに登場させるほどの個性の強い

政治家がいなくなってしまうことから少しずつ興味を失っていったようだ。

鎌倉に移り住んでは主に故郷湯前や鎌倉の風景画、挿絵を描くようになり多数の作品を残している。こうしてみるとまさに那須良輔という人は風刺と風景を描くことに人生を捧げた「風を描く人」だったと言ったことができるだろう。



九品寺=昭和63年(1988年)5月『鎌倉三十三ヶ所観音霊場巡り』より
出典：湯前まんが美術館 館蔵品図録 (I)